

イ ワ ナ

Salvelinus leucomaenis pluvius

種名



分類	サケ目サケ科	俗名		生活型	陸封型、一部降海型
分布	アママス・降海個体は、北海道から南は最上川および利根川以北の本州まで分布するが、ニッコウイワナとの境界は明確でない。 ニッコウイワナ：山梨県富士川および鳥取県日野川以北の本州各地に分布するが、他の型のイワナとの区別が不明瞭で、分布境界は明確でない。				
形態	全長約 180～350 mm。脂鱗を持つ。体色は、背側がやや黒褐色を帯びた緑青色で、腹側は淡黄赤色を帯びた白色。体側には、鱗と同大またはそれより小さい白色斑がある(ときにはない個体もある)。				
類似種	ふつイワナとよばれるのは、ニッコウイワナ、ヤマトイワナ、アママス、ゴギなどで、これらは、亜種および型分けの2つの考え方があり。ニッコウイワナは、体側に鱗大の黄色から橙色の斑点が側線から腹側にかけて認められる。アママス(エゾイワナ)は、大きい白色の斑点があるのが一般的である。				
生息場所	日本産の淡水魚のなかでは最も標高の高いところに生息し、本州の中部山岳地帯ではほぼ標高 900～2300mに生息する。夏季の水温が 13～15℃を上限とする河川の最上流域の淵を中心に生息しているが、アマゴ、ヤマメが同居しない河川では、やや下流まで出てくる。稚魚は石の隙間などの隠れ場のある河岸のごく浅い流れの緩やかなところに生息し、梅雨の終わる頃、流心付近に姿を見せる。				
食性	稚魚は主に水生昆虫などを摂餌し、未成年・成魚はカワガサ、トビケラなどの水生昆虫や落下昆虫を主に摂餌する。昆虫以外ではミズ、小魚、サンショウウオ、カエルなどを摂餌する。				
繁殖	産卵期・産卵期は9月～11月頃。日中の水温が 10℃以下になる頃から始まり、6～7℃以下になると終了する。産卵場所は、その地方のブナやミズナラの紅葉の盛期と一致する(静岡県例では9月下旬～10月下旬)。 産卵場所：谷あいの川幅 1～2mの沢に入り、淵の岸辺の岩陰や藪の一部が凹んで少し深くなったところなど、川床に起伏のある、流れの緩やかな浅い砂礫底に産卵する。 卵の性状：卵は直径5～6mmの黄色で粘性の低い沈性卵で、1つの産卵床に数十～百粒位産み落とされる。 発生・受精率は1～1.5カ月で孵化するが、そのまま産卵床(径 20×30 cm程度)にとどまり、融雪出水後に水中に泳ぎ出す。 仔稚魚の生活様式：浮上期は、少なくとも西日本では、融雪の増水よりもあとである。その後しばらくは、産卵場付近の岸より(水深5cm以下)の礫の隙間に入っており動かない。そのあと4月下旬から5月上旬にかけて、Aa型の場所ではやや下手に移動する。 成長：1年で 130～160 mm、2年で 160～220 mm、3年で 170～250 mmに成長する。ふつ2～3年で成熟する。				
配慮のポイント	○河床を平坦化するような河川整備を行なうと、本種が生息できる場が失われる恐れがある。 ○水中の溶存酸素量が十分であることが生息や卵がかかる条件。そのため、河床を平坦化するような河川整備では、水の落ち込みなどの地形が減少して、溶気が不十分になり、動きも平坦になり、水中の溶存酸素が十分確保できなくなる恐れがある。 ○上流のS型の淵の保全はきわめて重要である(採餌、休息の場等)。 ○工事による法面崩落や土砂投棄は、淵の埋没などを招き環境を単純化させる。 ○河川の上にオーバーハングして樹木がかかることにより、水面に木陰ができ、安心して休息する場が確保できる。さらに、この木陰から餌となる昆虫類が供給されるなど、河岸沿いの樹木は有効に活用されている。このため、河川改修等において、河川にオーバーハングした樹木や草本植物を除去することは望ましくない。 ○産卵期にはふだん生活している沢からさらに支流へと入っていくので、砂防堰堤などの設置は、本種の再生産に重大な影響を与える。 ○治山事業により河岸の植生が人工林になると、保水能力の低下から水量の減少や土砂の流入へつながることがある。このため、集水域全体を、その水漏涵養機能も含めて保全しなければならない。 ○水質汚濁の防止に留意し、水生昆虫などの餌生物が生息できる環境を維持することが大切。 ○人工開化や放流、養殖が盛んになり、各地の固有の系統群の維持が困難になっている。放流には細心の注意を払う必要がある。				

引用文献： 『川の生物図典』を改変